

## 目を覚ましていなさい

マルコによる福音書13章32～37節  
2023年3月12日  
松田 基子 師

今年の教団年会は、4年ぶりに対面で、一堂に会する事が出来、再会の喜びに溢れた年会でした。ただ、私にとっては、牧師として最後の年会でした。何時もの様に年会最終日には、引退教職感謝会が開かれました。会場の皆さんに対して引退を表明し、感謝の言葉を述べたのですが、会が終わった時に、

『私は本当に引退するのだ』  
との実感が湧いてきました。それと共に、  
『物事には、全て終わりが来るのだ。  
牧師としての終わりが来たように、  
私の人生の終わりも必ず来るのだ。  
これからはその事に備えて行きたい』  
と強く思われました。

さて、聖書の一貫したメッセージは、  
『見える世界、時間の中に置かれた  
世界は、必ず終わりが来る』  
と言うものです。しかし、その終わりと言うのは、  
『破壊や滅亡により、無に帰してしまう』  
というわけではありません。聖書の終わりは、収穫の時であり、新しいものが生み出される時なのです。今朝の聖書箇所は、イエス様が十字架に架かる事を覚悟して、弟子たちと共に、最後のエルサレム上りをされ、神殿を出てこられた時のことです。イエス様の胸中も分からない弟子たちの一人が、神殿の壮麗さに思わず、イエス様に向かって、

「先生御覧下さい。何と素晴らしい石、  
何と素晴らしい建物でしょう」  
と感嘆の声を上げたのです。  
するとイエス様は、

「これらの大きな建物を見ているのか。  
一つの石もここで崩されずに他の石の  
上に残る事は無い」  
と言われました。

この弟子をはじめ、私達は、いつも目に見える物、大きさや立派さに価値を置いて、それに頼る心を持っています。しかし、それは神様の

目から御覧になったならば、とても狭い世界で、頼りにならないものなのです。神様は、目に見ることが出来ない、人間の想像のつかない霊なお方です。永遠を支配しておられるお方です。その神様が、

『時間と空間を定めた有限の世界を、  
お造りになり、美しい愛の世界を築いて  
行くために、人間をお造りになりました』  
それなのに、人間は、神様の愛の御心に  
叛いて、  
『自己中心、人間中心の生き方をして、  
真の愛も正しさも分からなくなり、弱い者  
を踏み台にして、自分を喜ばせる社会』  
神様の御心とは、真反対の社会を造ってしまいました。

神様はその為に、神の御子を人の世に誕生させて、神様の御心を知らせる事になされたのです。そのお方がイエス・キリストです。イエス様は、永遠の世界を知っておられ、神様の御心と御計画を知っておられ、その事を弟子たちに、そして多くの人達に教えられました。この時、弟子たちが目の前の壮麗な神殿に目を奪われ、真の価値ある物が見えなくなっている事に気づかれたイエス様は、13章2節で、  
「これらの大きな建物を見ているのか。  
一つの石もここで崩されずに他の石の  
上に残る事はない」

と言われました。目に見える物、形ある物は、それがどれほど頑強であっても、例え世界遺産として、数千年を経たとしても、いつかはその姿を消して行くのです。壮麗なエルサレム神殿も、この時から約40年を経て、紀元70年に、ローマ軍によって壊滅しました。

さて、イエス様の一行は、神殿を後にされると、谷を隔てた所に在る、オリーブ山に行かれましたが、イエス様が神殿の方に向いて座られますと、4人の弟子たちが、イエス様が言われた言葉に心が騒ぎ、4節で、

「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴(しるし)があるのですか」

と尋ねました。弟子たちにしてみれば、

『神様の神殿であるエルサレム神殿が崩壊するなど、そんな事が起こるのは、世の終わりに違いない』

と思ったのです。

すると、イエス様は、7節、8節で、  
「戦争の騒ぎや戦争の噂を聞いても、慌ててはいけません。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである」

と言われました。有史以来、自己中心の世界では、自分の利益、自国の利益を求めて、奪い合い、戦い合う争いや戦争は絶える事無く続いてきました。どれ程多くの人々が、戦争や自然災害を経験し、世界が滅んでしまうのではないかと恐れた事でしょう。今日私達は、核兵器が使われる事がない様にと、切に願っています。

今日の置かれて居る状況は、核兵器の脅威だけではなく、気候変動による自然災害の甚大化、環境破壊は人々に不安を与え、その不安に乗じて色々な宗教が起こっています。その様なものに対して、イエス様は5節で、

「人に惑わされないように気をつけなさい。  
わたしの名を名乗る者が大勢現れ、  
『わたしがそれだ』  
と言って、多くの人を惑わすだろう」

と言われ、21節でも、

『見よ、ここにメシアがいる』  
『見よ、あそこだ』

と言う者がいても、信じてはならない。  
偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。

だから、あなたがたは気をつけていなさい』  
と言われました。

確かに、戦争があり、甚大な自然災害があり、天変地異が起こったならば、人々は人間の力の限界を感じて、神仏に救いを求める人が多く出てくるでしょう。それに乗じて、

『私が救い主メシアだ』

と自称して、そのカリスマ性で、人集めをする教主という者は、これまでも大勢居ましたし、これからも大勢出てくることでしょう。イエス様はそう言う存在の全てに対してNO.を言われます。人間はどんなに人間離れをした微や不思議な業を行ったとしても、人間は人間に過ぎません。罪ある人間が、決して救い主、メシアとなって、人を、その存在を、救う事は出来ないのです。この点についてはキリスト者には、偽りをかぎ分ける力があると思いますが、肝心な事に付いてはどうでしょうか。

キリスト者故に受ける苦難があります。

イエス様は、24節から、

「それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見ると、そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」

と言われました。

【人の子】と言う呼び方は、イエス様が救い主メシアとしての御自分を、政治的な意味合いを避ける為に使われた呼び方です。イエス様はここで、御自分の事を言っておられるのです。イエス様はこの後、全人類の罪を一身に負って、身代わりの十字架に架かられるのですが、3日目に復活され、40日に渡って弟子たちに現れ、弟子たちが見ているところで、天、つまり永遠の世界に帰られるのです。しかし、帰られたままではありません。イエス様は神様の命に従ってこの世界を終結し、裁き、新しい永遠の神の国をもたらせる為に、再びこの地に立たれる、つまり、再臨されるのです。

ここでは紀元1世紀の考えに従って、

「雲に乗って」

と言う表現ですが、その、言わんとしているところは、

『世界中同時に、全世界の人々が分かる事として、イエス・キリストは再臨される』

と言う事です。この事は目に見える世界、この世の知識や経験に絶対的価値を置いている

人々にとっては、荒唐無稽に思われる事でしょう。しかしキリスト者は、イエス・キリストの再臨を信じ、永遠の神の国の到来を信じるのです。

コリント第Ⅱの手紙の4章18節には、  
「わたしたちは見えるものではなく、  
見えないものに目を注ぎます。  
見えるものは過ぎ去りますが、見え  
ないものは永遠に存続するからです」  
とあります。見えない物、つまり、  
『イエス・キリストの約束を信じて、その  
約束に自分の人生を賭けて生きる』  
それが信仰です。イエス様は、ご自身が再臨さ  
れる事を話された後に、28節で、  
「いちじくの木から教えを学びなさい。  
枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の  
近づいたことが分かる」  
と言われました。

イスラエルにおいて、いちじくの木は、自生のもの、栽培用のものと、至る所に見かけます。唯、日本のいちじくの木と違って、何倍も大きく、沢山の実を付けます。12月には葉を落とし、3月頃に小さな緑色のこぶが実の様について、それが落ちて、あとに葉が伸びて、青い実が付き、6月頃に熟し始め、8月から9月頃が、いちじくの最盛期だそうです。人々は日々の生活の中で、毎年毎年、いちじくの生育を見ながら生活をしています。

人々は枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいた事を感覚的に知っています。イエス様はここで、弟子たちに、ボ～として生きてはいけません。いちじくの木の様子から、  
「夏が近いと言う事を、悟る事が出来るのだから、神様はそこに何を教えようとしておられるのかを悟りなさい。」  
夏が近づいた事が分かると言う事は、いちじくにとって、夏は収穫を現しています。

29節には、  
「それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、(つまり、世の終わりではないかと思える事象が続いたなら、目の前の苦しみに失望、落胆してしまうのではなく

て、)  
『イエス様はもうすぐお出でになる。』  
『信仰を持ち堪え、イエス様を信じ、愛し続けた信仰の実を、お献げする時が来る』  
と言う希望を抱きなさい」  
と言う事なのです。

30節に、  
「はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」  
と言われました。見える世界、時間と場所に制限された、この世界には、必ず終わりが来るのです。しかし、主イエス・キリストの言葉、約束は、終わりが無く、永遠に保証し続けられて行くのです。それはイエス・キリストが来るべき永遠の神の国の王であられるからです。

さて、キリスト者はこの様に、イエス・キリストの再臨を信じるものですが、それではただそのことを待っているだけで良いのでしょうか。曾て韓国の教会で、キリストの再臨の日を特定して、教会に集まって待っていると言う事がありました。勿論再臨は起こりませんでした。イエス様は言っておられます。

32節に、  
「その日、その時は、だれも知らない。  
天使たちも子も知らない。父だけが  
ご存じである」  
と、人間にはその時を知る事は、許されていません。

ペトロ第Ⅱの手紙3章8節には、  
イエス・キリストの再臨が遅れている事に対して、不信を抱く人々に対する言葉が記されています。  
「愛する人たち、このことだけは忘れないで欲しい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を送らせておられるではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」  
「主の日は盗人のようにやって来ます」

と戒めています。

そこで、イエス様の命令は、  
「気をつけて、目を覚ましていなさい。  
その時が何時なのか、あなたがたには  
分からないからである」

と言っておられます。全ては神様が良しとされる時に、神様の御心のままに最善が行われるのですから、

『私達はそれを知る必要はない』  
と言うことです。私達は神様に信頼していれば良いのです。私達は神様の僕なので、それよりも、与えられたことを忠実に果たすことが求められています。34節に、

「それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、  
僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、  
門番は目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ」

と言われました。ここでの、家を出る人とは、イエス様の事です。イエス様は十字架にかかれ、3日目に復活し、40日後に永遠の世界、神様の御許に帰られます。地上の世界を旅立たれるのです。御国に帰られるに当たっては、16章15節で、弟子たちに対して、

「全世界に行って、すべての造られた  
ものに福音を宣べ伝えなさい」

との使命、仕事を命じられました。

福音を宣べ伝えると言うことは、口でイエス・キリストを伝えると言う事だけではありません。イエス・キリストと共に生きて、キリストに倣う生き方を求め、隣人に仕えて行くことです。それぞれの賜物を生かして、キリストを証しすることです。門番であれば、夜目を覚まして、不審者の侵入を防ぎ止めなければなりません。しかし、来る日もくる日も何事も起こらず、主人が帰って来るのはまだまだ先の事だと高を括って、

「あ～疲れた……」

と眠ってしまった所に、主人が帰ってきたら、どうなるでしょう。

「不忠実な僕として、叱責されるでしょう。」  
このように、イエス様の再臨に関して、不信仰と言う敵は隙を見ては襲ってきます。不信仰という眠りに襲われないように気を付けていなければなりません。主人がいつ帰ってくるか分からない、イエス様が何時再臨なさるのか

分からない。だから私達は日々の務めを怠ってはならないのです。

しかし、それは後ろから鞭を受けるような思いで、イエス様の再臨を待つものではありません。

『私を愛して、十字架にまで架かって、救って  
くださったイエス様にお会いしたい。イエス  
様に喜んで頂きたい』

との思いで、信仰の目を覚まして、日々の務めを忠実に果たして行くことです。ルターは、

「もし、明日、世界が滅びると分かっても、  
私はリンゴの苗木を植え続けるであろう」

と言っています。

今日の世界の現実に目を向けますと、将来に対する不安を隠す事は出来ませんが、しかし、世界は尚、**神様の御手の中**にあります。**そこに私達の希望**があります。自分の地上での人生の終わりが先か、キリストの再臨が先か、分かりませんが、キリストの言葉、約束を信じて、**キリストの僕として、神の国に目を向けて、地上の旅路を誠実に歩み抜いて参りましょう。**

お祈りを致します

憐れみ深い天の父なる神様

神様は世界を創造し、人間への愛と、信頼をもって、これを託されました。それにも拘わらず、人類はこれを私物化して、汚してしまいました。その様な人間を尚も愛して、御子イエス・キリストの十字架の贖いに依り、お救い下さったお恵みを感謝します。

いかなる困難試練の中に置かれても、一途に神様に信頼し、キリストの再臨に**照準を合わせ、キリストに従って生き抜いて行く者と成らせて下さい。**

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。